

「特別史跡五稜郭を知る」

2、箱館奉行の北方経営と「五稜郭」

①、箱館奉行と、その施策

徳川幕府は、開港に先立ち、嘉永7年／安政元年(1854)6月26日、箱館を中心とした五～六里四方を松前藩から取り上げ、6月30日、箱館奉行を設置し、**竹内下野守保徳**(たけうちしもつけのかみやすのり)を任命。7月21日には、蝦夷地を調査中の**堀織部正利熙**(ほりおりべのしょうとしひろ)も加えました。

さらに幕府は、和親開港直前の安政2年(1855)2月22日、木古内村以東と乙部村以北をも上知させ、再び松前藩を奥州梁川へ移封し、全蝦夷地を直轄しました。安政3年(1856)7月には、蝦夷地調査中の**村垣淡路守範正**(むらがきあわじのかみのりまさ)を増員し、箱館奉行は三名となりました。



竹内下野守保徳

箱館奉行の任務は、

- ①、箱館を中心とした蝦夷地全域とアイヌ民族の統治
- ②、箱館開港に伴う対外関係の処理
- ③、蝦夷地の海岸防備

の三点が主なものでした。これらの任務に当たる箱館奉行配下の役人は、箱館、東・西・北蝦夷地、江戸、大阪、長崎などを含めて400人を越え、安政2年(1855)3月27日から、津軽・南部・松前・仙台・秋田の諸藩に蝦夷地の警備を命じ、その指揮命令も箱館奉行が担うこととなりました。



村垣淡路守範正

箱館奉行は、蝦夷地の海岸防備の強化や対外関係の処理とともに、民生の充実にも力を注ぎ、江戸から遠く離れた箱館に、開港場ならではの、西洋の進んだ技術を取り入れた独自の文化を開花させることとなります。基本的には、

「広く物産取開、往々百物百工とも致兼備、他国輸入品而已を不レ頼人民生活為レ致度見込」(本州からの移入品に頼らないで生活できるよう、必要な諸産業を多くの分野で興して行く)

を目指し、自立・自給の経済を目指したものでした。

箱館奉行による産業振興策としては、「屯田農兵」制度による北方警備と農地開拓、「七重薬園」などでの薬草、松、杉などの育成の他、西洋農業、牛・綿羊などの牧畜、西洋式捕鯨、本州各地から職人・技術者を招いて製陶(谷地頭に「瀬戸座」を設けての「箱館焼」)製紙、造船所の設置による西洋式帆船の建造(続豊治による「箱館丸」「亀田丸」の建造)、金・銀・銅・鉄・鉛などの鉱山開発、また、東部海岸の砂鉄を利用しての製鉄事業など、あらゆる産業分野に及びました。

②、武田斐三郎と、箱館諸術調所

箱館奉行による施策において、西洋の文化や技術を吸収する中で特筆すべきは「箱館諸術調所」の設置です。これは、西欧の進んだ学問・技術を研究・修得するための機関で、幕臣・藩士に関わりなく広く門戸を開放したため、日本各地から若者が集まりました。

「一、江戸表学問所之儀は官藩の區別嚴重相立 書生寄宿之名目有之候得共於当表右之差別相立候ては却つて不都合之廉も可有之に付 寮中之者は身分の貴賤に拘らず月旦評を以て席次相立 學術之成不成に準じ位等を分ち候はば自然勵にも可相成と候・・・」

一、学生之儀は原書生訳書生との両部に分ち 原書生は文典航海書算法書等順次を逐て教授仕り、訳書生へは各訳書上にも講習致し 何れも毎月六度宛相試み其熟不熟又は勤怠に応じ月旦評相定可と奉存候・・・」

(「諸術調所学寮御取開に付申上候書付」)

ペリーが箱館にやってきた時に応接役の一員を務めた蘭学者の武田斐三郎成章(たけだあやさぶろうなりあき)が教授役に任命され、造船、冶金、天文、数学、測量、製鉄、そして前述の「亀田丸」を使っての、ロシア「黒竜江」を遡つてのニコライエフスクへの出貿易実習や「箱館丸」での日本一周航海実習など、実践を重視する教育が行われました。

箱館諸術調所の門下生として、前島密(越後高田藩士、郵便制度の創設者、男爵)、井上勝(長州藩士、鉄道制度の創始者・鉄道局長、子爵)、吉原重俊(薩摩の人、日本銀行総裁)、山尾庸三(長州藩士、宮中顧問官・官法制局長官、子爵)、今井兼輔(越前の人、海軍大臣)、蛭子末次郎(箱館の人、大阪地方海員審判所長)らの、明治時代の各界で活躍する人々を育てました。



武田斐三郎成章

③、五稜郭とは何か

先に述べた箱館奉行の任務の中でも、初期の奉行が直面したのは、蝦夷地の海岸防備とともに、開港場である箱館の防備強化の問題でした。

箱館奉行所は当初、箱館山の麓(現在の元町公園あたり)にありました。さらに、箱館の状況を調査した結果、箱館の街は、

「孤山の麓に市塵稠密に櫛比致し、同所町外れ柵形と申所より亀田村迄二沙地 凡二十町程有之、横巾纔三百間計二町、東西海を帯し居候二付、軍艦一方二繫泊致し、炮門を開き候節は、通路難相成地勢」

であり、「一炮粉壺之死地」となる危険性があり、外国人が箱館山に登れば、

「眼下之市中は勿論、是迄之役宅并支配向住居為仕候場所等盡く見おろし、・・・人居多少之虚実も明白ニ相顕れ、其上勝手向庭先迄巨細盡く被見透候節は、威厳を貯へ不測を示し候場合無之、平常御取締二も甚差障り」(『大日本古文書・幕末外国関係文書』)

があることが指摘され、港の防備が手薄で、万が一、外国と問題が起きた場合に対応できないことが判明しました。

そこでまず、安政3年(1856)冬から、港の入口の岩礁を埋め立て、大砲を備えた台場(砲台)の建設に着手しました。そばに、弁天様を祀った祠があったため「弁天岬台場」などと呼ばれました。これを設計したのは前出の、箱館諸術調所教授である武田斐三郎です。海中の埋立て作業を伴う難工事でしたが、箱館市中の間近で行われたために、住民から労力・金銭の拠出が多く、順調に進んだ工事は、元治元年(1864)9月には完成しました。



弁天岬台場 遠景

さらに、箱館山麓の奉行所の移転・新築も検討され、軍艦からの艦砲射撃の届かない内陸部である、

「亀田村之奥 海岸ヨリ凡 直径二十四、五町程、鍛冶村之西、中道之南、平原曠野之内」、

(『箱館表御役所并支配向御役宅御場所替之儀奉_レ伺候書付』)

の場所に移転が決定しました。

この新奉行所の建物を攻撃から守るための構造として、ヨーロッパで16世紀

頃に、大砲・小銃などの火器の発達に対抗する有効な土木技術として考案された

「稜堡式築城法」(りょうほしきちくじょうほう)が採用され、弁天岬台場と同じく、武田斐三郎が設計しました。

武田斐三郎は、箱館に来航したフランス軍艦の士官から贈呈された築城書を参考に、斐三郎独自の工夫も加えて独特の縄張りを設計、安政4年(1857)の春から建設工事が開始されました。



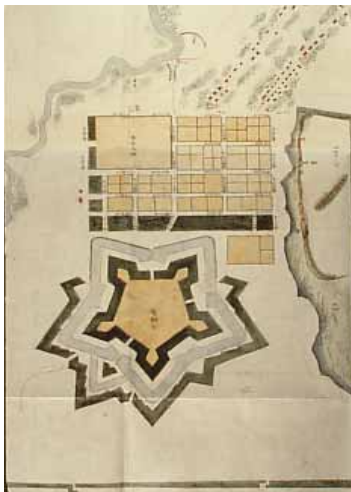
五稜郭之図(三分拾間図)

堀を掘る作業、その土を盛り上げて土塁を築く土木工事は、越後の松川弁之介(まつかわべんのすけ)が請け負い、工事開始の翌年には、堀と土塁が出来上がりましたが、蝦夷地の冬の寒さで地中の水分が凍り、あちこちで崩れたため、予定を変更し、石垣で堀の壁を補強しました。この石垣工事は、備前の石工棟梁、

井上喜三郎(いのうえきさぶろう)が請け負い、箱館山の裏側や、現在の水元などの石切場から切り出した安山岩を使用したとされています。



井上喜三郎



箱館亀田一円切絵図(部分)

工事開始から7年の歳月を費やして、元治元年(1864)6月15日に、工事は一応の完成をみたことから、箱館奉行小出大和守秀実(こいでやまのかみひでざね)が奉行所を箱館山の麓から移転させ、蝦夷地の政治・外交・防衛の拠点としての業務を開始しました。

役所の北側一帯には、奉行所に勤める役人達の住宅が建設され、整然と区画された屋敷町が誕生しました。堀の水や生活用水を得るための木製の水道管が地中に埋設され、亀田川に造った堰から直線で水が引かれるなど、「亀田柳野」と呼ばれていた原野は、一大行政区に生まれ変わりました。



箱館奉行所庁舎

ところが、わずか3年後の慶應3年(1867)10月には、徳川幕府は「大政奉還」により政権を朝廷に還し崩壊してしまいました。慶應4年／明治元年(1868)閏4月、最後の箱館奉行である杉浦兵庫守誠(すぎうらひょうごのかみまこと)から、明治政府が派遣した知事、清水谷公考(しみずだにきんなる)へ、事務引継ぎの後に引き渡され、箱館裁判所(箱館府)となりました。

④、稜堡式城郭と五稜郭

五稜郭の特徴である星形の「縄張り」は、「稜堡」と呼ばれる五つの突角が城郭本体から突き出していることによります。この形態は、16世紀頃のヨーロッパに於いて、大砲や小銃などの火器の発達に対抗するために考案された築城様式です。



フローレンス(フィレンツェ)鳥瞰図

各々の「稜堡」同士の距離は当時の小銃の射程距離内に収められ、防御の際には「稜堡」間で相互に援護射撃が可能な構造です。この援護射撃により、防御側の小銃の死角がなくなるのです。つまり五稜郭は、防御という点に特化した要塞建築であるということが出来ます。

また、五稜郭を「お城」と説明している解説書もあります。しかし、これまでの説明でおわかりのとおり、五稜郭の中に有ったのは「箱館奉行所」、すなわち、「御役所」です。つまり五稜郭は、日本人の感覚で言うところの、封建領主(殿様)の居館であ



る御殿や天守(閣)を持った「お城」ではなく、徳川幕府の北方経営の拠点である「役所」であったということです。重要な点は、五稜郭の本体はあくまでも、郭内に建設されていた「箱館奉行所」であるということです。

五稜郭が完成して以降の正式名称は「箱館御役所」と言います。建設途中の呼名は建設地の「亀田」という地名から「亀田御役所土塁」とされていましたが、既に工事の最中から「五稜郭」とも呼ばれていたようです。「五稜郭」はあくまでも俗称というわけです。